
陰から光へ放り出されて…

kan_sta_ku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰から光へ放り出されて…

【Nコード】

N4340X

【作者名】

k a n | s t a | k u

【あらすじ】

普通の少年を振る舞って、自分がイレギュラーであることを隠していた少年がある事件のせいで公となってしまう

そんな少年はいろんな出会いで何を思い何をするのか…

シリアスっぽい感じが少しありますがそこまでシリアスはない予定です…たぶん

感想、アドバイスなどもらえると嬉しいです

|| prologue ||

「んっ…うう」

1人の少年が目を覚ました

「ここ…どこ？」

少年は辺りを見回す

部屋にはベッドとトイレ以外何も無い

「誰か居ないのかな？」

少年はベッドから降り、扉のほうに歩いていく

扉はセンサー式のようなだが、反応せず全く開きそうにない

「僕はなんでこんなところにいるんだろう」

少年は思い出そうとしてみるが、思い出せない

知識は思い出せるのに、自分が何者なのか思い出せないのだ

この世界においてイレギュラーであるということを除いて…

その時、小さなモーター音が聞こえてくる

通気ダクトから小さな機械が飛んで入ってきた

少年は咄嗟に身構える

「そんなに身構えないでよー」

どこからか声が聞こえてくる

少年は辺りを見回すが部屋の中にはだれもない

「ここだよー!!ここ!!…あ、そっか忘れてた、ほいっと」

機械が展開しモニターが現れた

モニターにはうさみみをつけた女性が移っている

「……………誰?」

「ええええ!!?こんなときに冗談言うの!?!?しーくん!!」

「…………?」

「えーと?志季くん?如月志季くーん?私だよ?東さんだよー?」

「東…さん…………?…え?…あつ、あああ!!思い出した!!もう僕のこと忘れてると思ってた」

「そんなわけないよー!!突然行方不明になってビックリしたよ…

そんな事より助けに来たよ!!」

「助けに? どうして?」

「しーくん!! なんでそこにいるか分かってる!?!」

「えーと……うっ!!」

志季が突然うずくまる

「ちょっ!! しーくん!?!」

志季は気を失って倒れた

1年前……

志季は買い物の帰り、電話で話しながら歩いていた

『しーくん!! ちゃんとこの前渡したペンダント持ってる!?!』

「大丈夫だよ、ちゃんと首から下げてる」

『いつもちゃんと持っておいてよ!?!』

「はい」

『しーく……は………に……れて………』

「あれ？もしもし？…切れちゃった…ん？」

志季が辺りを見回すとスーツを着た男2人女2人に取り囲まれていた

「僕に何か用？」

「ええ、私たちと一緒に来てくれないかしら？」

「…………いやだと言ったら？」

「力ずくで連れていく！！」

男2人が志季に襲いかかってくる

「くっ！！…なんなの！？まったく！！」

志季は先に殴りつけてきたほうの腕を掴んでひねり、地面に投げつけ、気絶させる

もう一人のパンチを受け流した後がら空きになった腹に膝蹴りを入れダウンさせる

「さすがは如月志季くんってところかしら」

「何を知っている？」

「情報は割と簡単に手に入るのよ……と答えておくわ」

「…………何が目的？」

「あなたの才能を調べるなど…」

「それだけじゃないでしょ?」

「さすが、天才は違うね」

「天才って言うな」

志季は心底嫌そうな顔をする

「どう? 私達に協力s「遠慮します」…ならしょうがないわね」

女性2人の片方がハンドガンのようなものを取り出す

「ハンドガン?…いや、違うか…随分非道な手を使うんですね」

「一目見ただけで分かるなんてさすがねっ!!」

女性が志季に向かって連続で発射する

志季はサイドステップで避けながら接近してハイキックを放つ

しかし女性の体に機械が展開され、腕で防がれる

「ISか…」

志季はバック転で距離を取り、つぶやく

「降参してくれないかしら? 勝ち目はないと思うけど…」

「あなた方の道具になんてなりたくない!!」

女性がソードを振るうのをしゃがんでかわしながら答える

女性がまたハンドガンのようなものを発射しようとするが、志季は即座に反応しそれを蹴り飛ばす

「うぐっ!!」

志季は相手がひるんだ一瞬を逃さず、装甲のない体の腹に1撃いれる

「IS相手に生身でここまで戦うなんて…」

もう一人の女性が言葉をもらす

「痛いじゃないの……男ごときが調子に乗るなあああ!!」

ISを装備した方が一瞬で志季の目の前に移動する

イグニッション・ブースト
「瞬時加速かつ!!」

志季に向かってソードが振り下ろされる

志季は突然の攻撃に反応出来ない

「死ねええええ!!!!!!」

『ガキンっ!!!!』

「まったく、冷静になりなさい、殺してどうするのよ」

先ほどまで見ているだけだったほうの女性がISを展開し、防いでいた

「ちっ!!」

切りかかった方の女性が不満そうにISをもどす

「志季くん怪我はない？」

「へ?…ああ、はい…っ!?!しまっ!!…た…」

志季は声をかけられ返事をしてもう一人の女性の方を見ると、光が襲う

……そして光がおさまる

とつぜん志季がめまいでふらつく

「おっと」

光を放った女性が即座に支える

「すみません…」

志季から抑揚のない言葉が発せられる

「いいのよ、大丈夫?」

「はい」

志季の目には感情が失われていた…

「I S 適性のある天才の男の子…楽しみね」

女性は妖艶な笑みを浮かべ、志季のことを抱きかかえて空へ飛び立
った

Ⅱ 1 脱出Ⅱ (前書き)

ひさびさの投稿です
ちよつとグダグダで読みにくいかも？

Ⅱ 1 脱出Ⅱ

「し……！！しー……ん！！起きて！！しーくん！！」

「おわっ！！」

志季が飛び起きる

「しーくん、大丈夫？」

ディスプレイの向こうで束が心配そうに志季を見ている

「あ、うん、大丈夫……いろいろ思い出しただけ……」

「そっか……ごめんね、私がもう少し警戒してれば……」

「ホントだよ、なんでこんな施設一つ完全ハッキングするのに一年もかかってるの？」

「うわっ！！ブロックしてた本人がそれを言うの！？で、でも本人の意思じゃないから責められないー」

「ははっ、冗談冗談、それより時間が無いんじゃないの？」 おねーちゃん」？」

「おっ、その呼び方懐かしいねしーくん！！よし！！じゃあ、しーくん救出作戦開始！！」

束が楽しげに宣言するとさっきまで開かなかった扉が開く

志季は素早く扉の脇に移動し、外の様子をうかがい、誰もいないことを確認すると静かに部屋の外が出る

「そういえば、しーくんあのペンダント持ってるよね？」

「バッチリ持ってる」

志季は走りながら首から下げているシルバーでダイヤ型のペンダントを一瞥すると、口早に答える

「よかった！！作戦通りいけそう！！…あ、次の角右その先に1人いるよ」

「了解」

志季が角をスピードを落とさずに曲がるとその先にライフルを持った男が居た

「なっ！？どうしてお前が！？」

「くっ、よりによって警備兵か」

男がライフルを発砲する

志季は体がかがめてかわすと横の壁を蹴って、男のあたまに空中回し蹴りをたたきこむ

「さすががしーくん強い！！」

「まあこっちきてからはもっぱらISとプログラミングと戦闘訓練だったからね」

志季が苦笑いをうかべ、再び走り出す

「この先の角を左に曲がったらエレベーターに乗ってね」

志季は息切れもすることなく走り、エレベーターに駆け込む

「操作お願い」

「ラジャー☆」

エレベーターは上に動き出す

しばらくしてエレベーターは停止する

「しーくん隠れて!!」

「危なっ!!」

志季はドア横のスペースに隠れる

すると銃弾が飛び込んでくる

「しーくんどうする!?!」

「どうしよう…手詰まりだ」

突然金属の転がる音がする

「!?!?…グレネードかつ!?!?」

志季はどうすることもできず体をかがめる

そしエレベーターの外から強い閃光が放たれる

「志季!!今のうちに行きなさい!!」

女性の声が響く

「しーくんエレベーターを出て右だよ!!」

志季はなりふり構わず走る

聞き覚えのある…1年前のあの日、志季を洗脳した張本人の声に疑問を抱いて…

「ここを真っ直ぐ行ったら外だよ!!」

「了解!!」

志季はラストスパートをかけ、スピードを上げ外へと飛び出す

「…えと…こっからどうするの？」

「大丈夫だよしーくん、ちゃんと考えろ」「!?…来るっ!!」「え？」

志季は前に転がる

すると、志季がいたところをビームが通過する

「やっぱりか、ISが来るとやっかいだな…」

志季は辺りを警戒しながら呟く

「大丈夫だよしーくん」

「どういうこと？」

「だからさっきちゃんと考えてるって言ったじゃん、ちょっと待ってて…よし!!えいっ!!」

『防衛ロックプログラム解除、稼働モード移行中、キサラギシキ本人を確認…起動』

突然首から下げていたペンダントが光り、変形して逆三角形になり、下の角から等角に赤と黄色のラインが伸びる

「!?…まさか!？」

「そう!!そのまさかだよ☆ほらほら早速!!」

「わかったから、そう急かさないでよ」

「しーくんだったら1秒かからず展開できるくせにい…ってもう展開してるし」

志季の体にはグレーを主体に赤と黄色のラインが入った4枚のウィングの付いたISが展開されていた

『熱源6確認…』

「フォーマットとフィッティングやってないのに6機もか…」

「それなら終わってるから大丈夫だよ」

「?…なんで初めて展開したのに既におわってるの?」

「まあそれは置いといて先に逃げなきゃ」

「ねえ…なんでこの機体こんなに情報提供が少ないの?レーダーの範囲は狭いし、来る情報といえば熱源の数くらいじゃん」

「戦闘能力ばかりに集中してて、プログラミングするの忘れちゃった☆」

「ちよっ…あぶなっ!」

志季は遠くから高速で飛んできたエネルギー弾を後ろ向きに1回転してかわす

「おおー!、しーくんすごい!」

「すごい！！…じゃないよ！！これせっかく機体性能高いのに普通のパイロットじゃすぐ落とされちゃうよ！？…とりあえずここは早くにげないと」

志季は海の方へ急発進すると低空飛行で飛ぶ

「おー、速いねしーくん」

「さっきから聞きたかったけどその通信機機動力高くない？」

「まあね、束さんの最新作だからっ！！それよりまだ6機付いてきてるよ？」

「1度見つかっちゃってるから、撒くのはキツイな…」

「しーくん前方から急接近してくるISがいるよ！！」

「このレーダーどんだけつかえないんだよっ！！」

そして志季の前方からエネルギー弾が6発飛んでくる

志季は右に急旋回して回避行動をとる

「ん？何か様子が変わだな」

弾は全く志季の居たところを通過していない、むしろ当たらないような位置を高速で通過していった

「どういうことだ？」

弾は後方で追跡してきていた6機のISに直撃した、と同時に前方から1機のISがやってきた

「志季、そう警戒しないでよ……っていうほうが無理か……」

「どういうつもり？ さっきのエレベーターの

時もそうだし今だって、クロイア、あなたは施設の人間でしょう？」

そのISに乗っていたのは1年前、志季を洗脳した本人だった

「私は元々あそこの人間じゃなかったの、一部目的が一致していたから協力していただけ」

「目的？」

志季は訝しげにクロイアを見る

「……私、前から……志季に興味があって／＼／＼」

クロイアはもじもじしながら告げた

「……………は？」

「信じてくれなくてもいいけど、私は志季の味方だからねっ!!」

クロイアは志季にウィンクすると急上昇して雲の向こうに消えていった

「何だったんだ？ ……ん？ ……そういえば施設の時……」

突然志季は顔を赤くする

「あれ？しーくんどうしたのかな？」

「な、何でもない！！……ぶつぶつ（アイツう洗脳してるのをいいことにい！！）」

「しーくんそろそろ逃げたほうが……あっ」

束の通信機が煙をあげ始める

「ああ、さすがにしーくんの専用機について行くのは無理があったかあ」

「えっ？ちょっと？」

「ごめんしーくんこれこわれちゃう、なにせしー……専……は……」

「うわっ！！」

束の通信機は爆発して落ちていった

「こっから……どうしたら……いいんだ……？」

「確かここはフランス沖だったはずだから……方角は……あっちが北か……とりあえず陸地をめざしながら、ハッキングして警備に穴をつくっておくか……」

志季は空高く飛び去って行った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4340x/>

陰から光へ放り出されて…

2011年11月4日19時03分発行